

ようし、決してシリーズ化などされなかつたに違いない。

女性の場合、どれほど仕事で頑張つても、負け犬というだけで、

「でも女として不幸だわねえ」

と判断され、さりとて「負け犬で文句あつか」と漂泊してみても、美しくは見えないのです。

そこで私が理解するのは、女性の人生における真の仕事とは、恋愛や結婚といった「つがい作り」行為なのだなあ、ということ。金銭を得るための仕事は、「女としての人生」の中では仕事というより余暇活動のようなもの。だからこそ、つがいも作らずに働き続ける女は「女として不幸」であり、つがいは作つても仕事ができない男は「男として不幸」なのです。

「女として不幸」というフレーズは、ここにきてとみに、その罵倒力を高めてきました。それというのも、緒方貞子さんのような人の存在のせいで、「日本で一番優秀で忙しいキャリアウーマンですら、結婚して子供も産んでるのだ。下々の女が『仕事に忙しくて結婚なんてする暇ありません』などと言うのは言い訳だ。単に魅力がないだけだ」という空気が、濃厚になつてきているから。

「女として不幸」というフレーズは、ここにきてとみに、その罵倒力を高めてきました。それというのも、緒方貞子さんのような人の存在のせいで、「日本で一番優秀で忙しいキャリアウーマンですら、結婚して子供も産んでるのだ。下々の女が『仕事に忙しくて結婚なんてする暇ありません』などと言うのは言い訳だ。単に魅力がないだけだ」という空気が、濃厚になつてきているから。

「仕事もしたいし、結婚して子供も産みたい。女として、当たり前のことです」

などと言う、プチ貞子達。そう、ここでもやっぱり出てくる、「女として」。私を含め、女として幸せではないとされる未婚女性は、自分が「女として不幸であるらしいこと」に鈍感です。というより、鈍感だからこそ未婚でい続けているのです。

今の生活において、仕事は楽しくて良い友は多く、好きなものを食べて好きな本を読んで好きな所へ行き……と私は人間としてまず幸福なのだが、どうやら「人間としての幸福」は「女としての幸福」には負けるみたいだなあということも、うつすらと理解できる。

この「うつすら」というのが、私達をして「女として不幸」と判断されるに至つた理由なのでしよう。女として幸せな人というのは、女としての幸福を人生の第一義として考えて生きてきた人。「うつすら」などと寝呆けたことは、絶対に言わない。

女として不幸な私が、常識的な大人に、